

贈呈 井伽關

不ま屋様



9

KAMAYA
諸橋合名会社

21日-27日
『愛すべき御婦人たち』
『晩 菊』
28日-3日
『水着の花嫁』
『荒 神 山』

ひかり座

＝夏の服地＝

◇インデアンヘッド◇
◇スラフヤンクロス◇
◇アイリビツケ◇
◇パンビーチ◇
◇舶来シャークスキン◇

—豊富陳列中—

マルエ洋装店

銀座通り 電話265

帽子と

化粧品の店……

エ ン ド ー

平市2 電話1028番

眼鏡専門

…各眼科醫指定店…

玉 屋

平市二丁目

電話910

世界的名曲六段の作曲者
八橋檢校は平の生れ
名曲六段を記念する

銘菓
六段最中
六段羊羹
平 凡

電話五〇九番

盛夏向呉服

ゆかたと單帯

中元御贈答用品各種取揃え

サンマーサービス大賣出し中

三井呉服店

平 三 TEL284・1248

撮影とDP

学生時代の思い出写真は
お馴染みの…………

三光館で

アマチュア写真は当商会の特売
フィルムでDPは最高の技術と
良心的スピード仕上げの……

三光商会へ

平市並木通り
TEL 1124

爽やかな夏の

味覚には

岡田アイスクリーム

姉妹品岡田アイスマイルク

岡田ミルクホール

製造発売元

平市岡田牛乳

特 工 家 部
品 庭 業 殊
一 式 用 用 用

販賣修理

磐城ミシン工業所

営業所 平市五丁目二
(釜屋西隣り)
電話 一三五四番

ラ イ ト イ ン キ
エ リ オ ッ ト 万 年 筆
洋 画 材 料
学 習 参 考 書

文 魁 文 堂 書 店

電話 小売部 夜間
御売部 一八九一
平市才樋小路五

関 伽 井 才 十 号 目 次

表 紙……………鈴木 良

創 作

少 女 期……………草野 房子……………(1)

訪 れ……………成 子……………(6)

紫 陽 花……………緋 沙 子……………(14)

眞美子への手紙……………松 君……………(17)

褪 色……………諸橋 恭子……………(22)

随筆小品

私 の 告 白……………志月 きみ……………(12)

昨年のノートより……………無 名 氏……………(20)

どんな街にも……………八木 東作……………(2)

磐城ミシン工業所

営業所 平市五丁目二
(釜屋西隣り)
電話一三五四番

魁文堂書店

平市才樋小路五
電話〔小売部 夜間 一八九一番
卸売部〕

関 伽 井 才 十 号 目 次

表 紙……………鈴木 良

創 作

- 少女期……………草野 房子……………(1)
- 訪 れ……………成 子……………(6)
- 紫 陽 花……………緋 沙 子……………(14)
- 眞美子への手紙……………松 君……………(17)
- 褪 色……………諸橋 恭子……………(22)

隨筆小品

- 私の告白……………志月きみ……………(12)
- 昨年のノートより……………無 名 氏……………(20)

苑

詩

- どんな街にも……………八木 東作……………(2)
- 静 寂……………石本あきの……………(9)
- 河……………中根成子……………(9)
- 旅 愁……………菱沼 紀子……………(10)
- ある雨降りの日に……………久 子……………(10)
- よ き 人……………鈴木 澄夫……………(11)
- た わ ご と……………由 貴 子……………(11)
- こ た つ……………石本あきの……………(19)
- 九月四日の夕暮……………鈴木 澄夫……………(20)
- 短 歌……………松君・志那かつら・幸子……………(8)
- 俳 句……………秋 子……………(7)

一日一食は
東京堂の……
ビタミン
カルシウム
入パンを

ベーカリー 東京堂
平市三丁目 電一五九九
平市才樋小路電一一〇八

★美しいデザイン……

ワンピース

★清楚な……

ブラウス
スカート

盛夏向紳士服豊富取揃え

Yシャツ・開衿シャツ
替ズボン・ボロシャツ

平市三丁目

盛高屋

電話/608・1093

海山に……

爽やかな初夏の風は踊る
カメラは美しいあなたのまなざしを求めて……
数多い田中のカメラはあなたのお出でを待ち致しております

田中カメラ

平市三丁目 電 576
三十米通り 電/860

健康で明るい！

総合ビタミン入
パンビタンを……

瀬尾薬局

平市才樋小路
電話五五三番

一流メーカー
メリヤス・肌着
可愛らしい子供服……
品質本位
つるや
品質本位
平市四丁目 電話/40番

くすりの御用命は……

堀薬局へ

平市二丁目 電話326

平名物

市川のアンパン……

黒ダイヤ羊羹
黒ダイヤ最中

電話九三六番

あなたの！
優秀なカメラ
卓越する撮影
を

良く表現するDP

信販加盟

飯田カメラ店

電一三六五

開花亭パン店

五町目 電話 342

夏休みの旅行には

スマートな

フクヤマの鞆を！

袋物とかバンのお店

フクヤマ

あかお

第十號

一日一食は
東京堂の……
ビタミン
カルシウム
入パンを

ベーカリー 東京堂

平市三丁目 電一五九九

平市才樋小路電一一〇八

★美しいデザイン……

ワンピース

★清楚な……

ブラウス

スカート

盛夏向紳士服豊富取揃え

Yシャツ・開衿シャツ
替ズボン・ボロシャツ

平市三丁目

盛高屋

電話/608・1093

海山に……

爽やかな初夏の風は踊る

カメラは美しいあなたのまなざしを求めて……

数多い田中のカメラはあなたのお出でを待ち致しております

田中カメラ

平市三丁目 電 576

三十米通り 電1860

健康で明るい！

総合ビタミン入

パンピタンを……

平市才樋小路

瀬尾薬局

電話五五三番

一流メーカー
品質本位
メリヤ
可愛らしい子
つる
平市四丁目

くすりの御用命

堀薬

平市二丁目

黒ダイヤ羊羹
黒ダイヤ最中

電話九三六番

どんな町にも

クラブント作
八木東作譯

どんな町にも半年より長く居てはならぬ

その町の来歴を知り

男たちが泣くのを　そして

女たちが笑うのを見終つたならば

そこを出て行つて

新しい町をながめよ

友と恋人を見捨て

唯　永遠の幸福を道連れに町を離れて行けば

私の唇は時々歌をうたう

その町が教えてくれた歌を

私の足は軽やかに歩く

その町をも星で飾つてゐる大空の下を

附記——クラブントはドイツの詩人で、本名をアルフレット・ヘンシユケという。一八九一年十一月四日、オーデル河畔のクロツセンに生れ、一九二八年八月十四日、ダフオスで死んだ。三十六年の短い生涯に、多数の優れた詩と数篇の長篇小説を残したが、特に作詩では形式や内容の変化が著しかったので「文学のカメレオン」などと呼ばれた。



少女期

草野 房 子

それが悲しいきつかけになった。

休憩所になつてゐる図画教室の、つめたく光る床のうえにおちて、いたましくも腕のつけ根からもげてしまつた石膏の少女像を、目にみえぬ魔法使いの手が天から伸びてきて、元通りにしつかりつけあわせてテーブルに載せてくれるかのような妖しい錯覚がマリの胸を瞬間、ながれさつたのだが――。

こわしたの？

永井さんのするどい声が背後から覆いかぶさつてきてそれと同時にあたゝかい肉体の感覚が押しよせてきた。(この石膏は永井さんが自宅からもつてきて、クラスのために貸してくれたものである)

――ごめんなさい。

マリはチヨコレートの匂いのする、すがすがした上ずつた声でやつとそう言つた。

永井さんはしばらく黙つていた。永井さんはクラスの中のひとを支配できるいちめつ子である。

運動場でしろい火花がぼんぼんと続げまにうちあけ

られた。後の部のはじまる合図である。

腕と腕、肩と肩とを、ぶつつけあつてがやがやと階段をおりてゆくクラスの人にまじつてマリは永井さんから肩を組まれて、じつと唇をかみしめながら波のように押されていった。

――先生出ていらしたわ。

永井さんはマリの肩をつきはなした。はなされた方に目をあげると、受持の先生が白いスボンの折目をびんと張つて職員室の前の石段に立つてゐる姿がマリの心を吸いつくした。マリはスカートをひらひらさせて、いつもの美しい抑揚のある少女の走り方をしていた。

――先生、脚を痛くしちゃいましたから、リレーのとき永井さんに出てもらつてもいいですか

胸がどきどきして、耳のつけ根のあたりからさあつと紅くなるのがマリには自分でもよく解つた。

――今、ここまで走つてきたぢやないか

先生は笑うと白い歯がひかつた。

――どこを痛くした？

――こことこ。

マリが膝のあたりを、もちもちしながら示してみせると、先生は、どうら、と言つて背をかがめて、マリのスカートを上に押しあげて其処を調べた。

――おい永井。

先生は永井さんと呼んでマリの代りに選手になる事を命じた。これでやつと石膏を毀した罪を許されたわけだ空には万国旗、校庭では歓声がわれていた。

マリは大人のようなしらじらとした気持でその渦巻からはなれていった。

進行係の場所ときめられた砂場に行つてぼんやり腰を下していると、緑の腕章をつけた譲が、真新しいパンツで、さつと走つてきてマリの目の前に砂をはねあげてとびこんできた。

マリと目を合わせると譲はうしろを向いて、今度は両手で砂の山を造つてそれをぐんぐんマリの方に押し寄せてきた。さらさらと山が崩れた。すると又新しい山を作つて押し寄せてきた。そうしてだんだん近づいて来ながら、マリの前を通りすぎで止つた。

――さつき予選のとき、そこそこでも少しで永井に追い越されそうだったね。

マリは、うん、と言つて手で足の先に砂をかけながら正直に胸がどきどきした。

譲も全校リレーの選手であつた。

校庭の一隅から明るい音楽がわきあがつてきて、五年

生女子の花のようなダンスの輪が、しぼんだり、ひらいたり、なびいたりしていた。

譲とマリは同じように眩しく目を細めてそれに見入るが、心の中ではなにかたのしく、もつれあつてゐるのだつた。

リレーのはじまる笛がなつた。

ぼつんぼつんと各学年から選手が集つてきて、その真中に背の高い永井さんの白い笑つてゐる顔があつた。

赤い布で鉢巻をした譲が、かがんでスパイクを穿いていた。それから立ちあがつて男子の列のいちばんうしろに並んだ。

女子の一番うしろに並んでいた永井さんと譲が何か話しあつた。そして譲がさつきから砂場にうづくまつてゐるマリの方を見た。

前に永井さんの石膏をこわしたときの失望よりも大きな、うるおいのある悲しみが、だんだんマリの中でひろがつていった。

ばあん、とピストルが鳴つて女子の部のリレーがはじまつた。

一年、二年、三年、四年、五年、そして永井さんが白いバトンを受取つた。

――しつかりイ、しつかりイ、白、しつかりイ永井さあん！ マリは透きとおつたソプラノで周囲の声援に和しながら思わず、心からそう叫んでいた。

それは泣きたいほど、悲壮な気持であつた。

創作

訪

れ

一年 成 子

その日私は、かつて最愛の友であつた人を、ある田舎町に訪れた。その人に長い事会っていない私は、多少の恐れをいだいて、舌びた屋敷の木戸をくぐつた。

「ごめん下さい」二、三度声かけると、奥の方で「はい、たゞいま」とかすれたような声がして、前だれで手をふきながら、老婆が現れた。

「清さん！」「あれまあ、美江さんじゃありませんか。これは／＼ようおいでなされた。さあ／＼どうぞ」

私はそのまゝ早口に敬一さんのことをたづねた。「敬一様の事ですわ？そりや、貴女お気の毒で……」と清は急にしずんだ様子で言つた。「右足がきかないんでございますよ。のびたきりしてね。それに右手は字もお書きになれなくて。でもまあよく左手でお書きになります彼の右手足がまひしてしまつたのは、敗戦後、ソ連の捕虜になつてからである。激しい労働にたえ切れず、一種の脊髄病にかゝつたのだと、彼の母は、手紙で語つたそれだけでなく、からだの弱い彼は、次の年の第一次引揚船で帰国することを許されたのである。彼は私に何も知らせしてくれなかつた。たゞ、仕事の都合で東京に出て

働いている彼の母が、帰国後二カ月も過ぎてから、手紙で知らせてくれたのである。

清は下駄をつつかけて、外へ出て行こうとしていた。「待つて下さいよ。旦那様を呼んで来ますから。本当にいつもは出かけたなりなされないのに、今日は……」清は年寄とは思えぬようなしつかりとした足どりで庭を出て行つた。

戦争中、私はこの家を二度三度訪れた事があつた。その頃彼の母は、この町の銀行につとめ、ばあやの清と二人で住んでいたからである。その時も初夏であつた。私は初夏以外にこの家を訪れた事がないのである。しかも毎年のように、この家は變つてゐる。庭の造りといふ室の配置といふ、すべては私の記憶をにぶらせてしまふのである。

「貴女でしたか」いつの間にか、不自由なからだを杖でさゝいながら、一人の青年が庭さきに立つてゐた。その表情は、驚くほど冷たくとざされてゐた。

「突然で驚きましたよ。僕がここにゐるのよくわかりましたね」「おばさんが知らせて下さいましたの」「母が

ですか」彼はふと黙つた。

それから私達は、彼が戦地へ行つた後の生活の事や、どんなにみんなが敬一さんの帰りを待つてゐたかを、そして彼は、苦しかつた捕虜生活の事を、お互に言葉少く語り合つた。清は始終笑つたり、涙をこぼしたりした。そして子供のようにはしやぎまわつてゐた。しかし、一たん彼女が座をはずすと、たちまち二人の間は重苦しい沈黙でさえ切られた。

昼すぎ、私達はいやにむし暑くなつた室をぬけ出して庭へ出た。そしてアカシヤの木陰で緑の風を呼吸した。突然私は尋ねた。「いつ私達の所へ帰つていらつしやいますの？」

彼は戦争へ行く前に十数名の同志と共に、ある雑誌社を形成してゐた。(勿論、私もその中の一人なのであるが)彼はすばらしい情熱を持つてゐたし、文才もすぐれてゐた。そして、彼の望む事はすべて実現せずにはおかないほどだつた。それだからこそ、彼が戦地に出発してしまふともなく、私達は費用やその外いろ／＼な事で雑誌を発行出来なくなつてしまつたのである。今は私達の同志も数名に減つてしまつてはいたが、彼等はみんな元気だつた。そして敬一さんが戦地から帰つて来たら、さつそく同志を集めようと、張り切つてゐたのである。彼はまひしてゐる右手を、後におしやるようにしながら「僕なんか今じや、ただの場所ふさげにしかなりませんよ」と言つた。「そんな事ないわ、みんな貴方を待つ

てゐるんです。貴方がいらつしやらなければ何も出来ないんですもの」「僕にだつて何も出来やしない」彼は冷たくつきはなした。

「いいえ、貴方なら出来るわ、あんなに望んでいらつたんですもの。からだがまひしてしまつたからつて、そんなひがみをおしやるものじゃないわ」

彼はふと私を返り見て、唇にかすかな苦笑を浮べた。私は彼がどんなに冷たい態度で私に接して来たとして、

も、その仮面をとり去つて、私に従わせる事に自信を持つてゐた。彼は外面はどんな事にもひるまない頑固なようでありながら、内面は案外に心の動かしやうい性格である事を私はよく知つてゐたし、また彼が相当私を信頼してゐた事は事実であつたから。そして私はなほも熱心に語つた。しかし彼の表情にはすこしの動揺も見い出せなかつた。

「僕は貴女が幾度すゝめても、二度とあそこへは行かないつもりです」しばらく言い争つてから、とう／＼彼は

俳句

秋子

蚊を追へば

風鈴すゞし夜風吹く

夜目白く

月に露おく月見草

そう言った。そして私は、絶望的な気持ちになつて言った「敬一さん、貴女はもう、私達の心を遠く離れてしまったのね。私にはもう貴方の心をとらえる事は出来なくなつてしまつたのですわ」

そして激しい胸の動きを感じながら「私は今だつて変らず貴方を——」「やめましょう」彼は悠然と私の言葉をさい切つた。「僕達はお互にもう昔の僕達ではないのですから。僕がかつて感じた激しい感情も、人を愛する心も、ソ連での苦しい生活がかみくだいてしまつたのかも知れませんよ」

私は涙もない淋しさにおそわれた。そしてみじめな私の心は自尊心を傷つけられて、これ以上そこにとどまる事はたえ難かつた。

帰る時彼は私に言つた。「僕は今、たつた一人になりたいのです。雑誌を編集する等という意力は勿論ありません。みんなに貴女からわびて下さい。さようなら」これが私達のお別れなのだと思うと、やはりせつない哀愁に胸が痛んだ。

「もうお帰りですか？」清は不満そうに台所から出て来た。そして「ほんとうに、また来て下さいよ」とすがるように言つた。あたりはだいぶ涼しくなつていたが、太陽はすこしばかり西にかたむいたばかりだつた。

淋しい田舎の駅で、私は汽車を待ちながら考えなおしていた。効果のない事はわかっているけれども、いつかまた彼の家を訪れてみよう。

●短歌●

松 君

しるべなき遠きうわさの波の端に

君いづくやとひとり悲しむ

志那かつら

忘れおきすみれの鉢も病みてから

恋しきものと何故か思わる

植えしままに手も触れざりしスイートピー

か細き蔓を今日見いでたり。

幸 子

いそがしや学びの終えて日は暮るる

目にしずかなる藤の垂れ花

詩苑

静 寂

石本 あきの

私の前に静肅が
今

たつた今やつて来た

そして私に

一瞬

無限のよろこびを与えた

だが………

無限のよろこびは

幾万となく

重たいあるものを背負つた

水滴と共に

たつた今

無限のさびしさに

変化してしまつたのだ

河

中 根 成 子

私はひたすらに歩いた

はてしなく続く河岸にそつて

水は白く、又灰色にそして緑色に

何ごともなく

無言の流れをきざんでいるのだ

河は一定の方向に流れる

あゝ 河は自由なのだ

私も自由になりたいと思う

私は尚歩く

歩くことがほんとうに楽しいのだ

河ははてしなく続いている

私は何も考えたくない

今私は

水のように自由で卒直でありたいことのみを

考えているのだから………

旅 愁

菱 沼 紀 子

車窓に
ふと幼ない頃の記憶が浮かぶと
もう成熟しつゝある
私の脳裡から
山中の一小駅のネームまでもが
あざやかによみがえつて来る
すべてを忘れ
いのちまでも理めようとした
ここ田舎での日々は
田と空と山のみの
単調なものであつたが
そして又たつた三カ月の間だつたが
田舎は私の人生のポイント
夕日の落しかげが
私の過去を一つ一つ
車窓に映しては流れ行く
激しい旅愁が
私の胸いつばいに広がつていつた

ある雨降りの日に

久 子

あの時あの道を
傘のさしたあの人と
ぬれた私だけが歩いていたら
すばらしいロマンスが
生れたであらうに――
あの人は傘の中ですましていた
私は友と見ぬふりをして話していた
雨だけが二人に同じ様に降つていた
あの人は私のことを知らず大きな足音で歩いていた
真すぐ前を見て
私は小さな足音であの人のらしい足あとをそつと踏んだ
一寸後をむいてくれたらと想いながら
あの日あの道を
私達だけが歩いていたら
美しいロマンスが生れたであらうに――

よ き 人

鈴 木 澄 夫

た わ ご と

三 年 由 貴 子

よき人よ
せめて慰さめてよ
この荒める心を
はらいのけてよ
憂いの露を……
……
よき人よ
枯れたる心に一滴
涙を与え給え
美わしき笑を
投げたまえ
……
……
あゝ我独りうらぶれて
わが運命を泣しめど
我青春は帰り来ず
過ぎにし時よ、わが夢よ
のぞみはすべて甲斐もなし

私は口ずさむ
ポーレットの名を
あわれ空襲のさ中にも
ポーレット
お前は小犬のことで一ぱいだつた
あわれ清き流れにも
ポーレット
お前は流れる小犬を追つていた
あわれ冷い小犬に頬ずりしながらも
ポーレット
お前は悲しみのうたを知らない
あわれ牧場の朝は明るくも
死んだ小犬の土埋めに、涙も知らない
ポーレット

隨筆

私の告白

志 月 き み

序 詩

ひそけき夜の空の月輪孤独を

きみよやわらかき胸にさとれるならば……

其の頃、私は何かを——それがなんであるか審らかにすることは到底不可能なのだが、至純な美しい何かを愛したいと願っていた。私の愛の証しがたてられずに果てたとしても虹のような愛の幻影だけで私は満ちたりたに違いないと思う。明るい太陽の下、緑なす川の辺の芝生に憩いつゝ私は深い思索と神秘的な恍惚に引きづりこまれて、疲れた物憂い瞳に、あのようなやるせない黄昏の微光を見るのが毎日であつた。太陽は輝いていた。草は胸苦しい匂いを漂よわしていた。そして私の胸には高貴な苦しみが宿っていた。それは丁度、愛らしい山鳩が奥深い山のしげみの間に己のねぐらをはぐくむように、太陽の光、草の匂ひに埋もれて、私はかなたのいずくとも知られない神秘的暗い世界から徐々に引き出されてくる黄昏というものにしめやかにつゞみこまれるのを待つのであつた。

夜——孤独——其の底知れぬ深い静かさを私は如何に愛していたことか。快地よい羽根ぶとんのような夜の静寂な空気の中心でキリスト信者が美しいマリヤの映像を見るように私の愛の姿を見んものと思つた。夜毎に、そのようにして、私に訪れる夜は清浄な色合いを加えていつた。そして、夜の私に私は最も純粋な私の美しさを見た。美しい夜は私に月の光を愛することを、先づ教えた。風の音を愛することを教えた。月の光、風の音に物問ひかける私の姿を私はこの上なく好んだ。窓から流れる月の光は、私の頬を青く濡らしていたに違いないし、風の音は私の胸の音を聞

いたに違いない。それらのうへに私は私の人生を——いや私の人生を月の光、風の音によつて飾っておきたい……出来るならそうしておきたいと思つたのである。其の美しいよわ弱しい幻影を私は何時とはなしにほとんど私の夢に描いていた。月の光にふちどられた人生——其れを思つて私は涙を流した。

或る月のない、風もない——それは全く死のような暗闇の夜であつた。私は机の灯を消してから、静かに夜の庭へ降りて行つた。さゝやくような泉水の噴水の音だけをたよりにして、私は素足であつたために濡れた土の感触が私の体には滲みだ。何一つ見ることの出来ない夜の中で、噴水は玉のように散りに散つて、それが水面をかすかにくすぐつていた。その幽霊の様な生きた白土は私に何ともいえない感銘をあたえずにはおかなかつた。私がそこに見たものは月の光でなく、勿論風の音でもなく、噴水それ自体ですらもなかつた。私の見たものは、全くそれは私自身の清烈な孤独の傷口であつた。孤独な傷口のつぶやきであつた。噴水のこぼれる水を私は掌に受けとめ、私はそれに対して心から接吻しないではいられなかつた。

かつて私は月のもつている孤独な青白い輝きを知つていた。風の持つている孤独の歌声も知つていた。而し、その夜の水のような空しい努力をくりかへす孤独を知つてはいなかつた。

空しい努力の孤独！それは私に非常な寂しさを与えはしたが、私を一層きびしくきたえてくれたことを感じた。その殆んど降りそぐ愛情と見まがうほどの空虚なやるせない水滴の散乱の冷たさに私は私の愛の行方をひしと感じたのである。

かくて、私の愛したという願いは一種の透明な美しい孤独を見出すことに終つてしまつたのであつた。月の光、風の音にふちどられた人生を描いて涙した私の幼ない感動を私は今、甘美に思い起している。十字架の道を選んでしまつた私の今のきびしい思想を氷の花の様に私は抱いて一人生きている。遠くに去つた月輪の夢を心の押花として残すことに寂しい満足を味わいながら……



紫陽花

緋 沙子

道子はなごりおしそうにピアノのふたを開めると腕時計を見た。

六時半。

何よりも好きなピアノを弾いている間はまるで時間の束縛から開放されている様にいつの間にかこれ程の時が過ぎたのか一向気がつかなかった。

六月の長い日もようやく西に傾いたらしくガラスを透してくる西日が眼に痛かった。人気がない長い廊下をヒタ／＼とスリッパを鳴らしながら今日の練習を思い返して見た。あまり練習し過ぎたらしく指先がほてつたが、鍵のつめたい感触がかすかに残っていて何とも言えない気持だった。

しかし楽しい心も古びた靴をはいて新鮮な外氣にふれると一度に吹きとんでしまった。ひよる長いよりなさそうな自分の影を踏みながら歩いている憂うつそうな道子はあたかも水鉢からとられた金魚の様だった。

道子の家はここから田舎道を三十分歩いた所の一部落にある。そこはDという小さな炭坑町なのだが彼女は、

なつていた。

父にしかられるのをびく／＼していた細い体の母は四年前に死んだ。

この世から消えるその日迄、父の気嫌をとり目のまわる程仕事をして、夕ぐれ突然心臓マヒが起つてなくなつたのだ。

それから一カ月過ぎた頃だったろうか……母を慕っていた兄は、彼とたいして年の違はない女を父がつれて来てから、悩んで東京の方に出してしまつた。

兄は偉らかつた。仕事をみつけて働きながら大学を卒業した。この間も家の事は忘れず時々金を送つて来た程だった。兄は、母に内面的にも外面的にも非常に良く似ていた。

神経質な感じの眼、何か云おうとする時癖になつていゝるまゆ毛をちよつと上げて、小さく唇をなめる当りすべ母を想わせた。

いやに大きい継母の声に気がついてみると道子は机の上の母の写真をしつかり抱いていた。

◇ ◇ ◇

「困るじやないか、お前さん今日も休んだのかい？ 今月はこれで五日だよ、五五の二十五で二千五百円の損か、いつも／＼休まれちゃあ私も前さんも乾干しになつちゃうよ、本当にしつかりしてくれなくては困るんだよ。お爺さん」。一口に言いけると、鼻の頭の汗をこぶしてつるりとなでやわらかい手で派手なゆかたのはだか

大嫌いだ。それでも十七年間毎日そこに起き、そこで育つた。今日も彼女は三十分後には煙りつばい長屋の内をくぐらなければならぬのだ……

◇ ◇ ◇

継母がいるのかと思つたら父一人だった、矜くびのよこれがひどく目につく丹前をバンドでしめて、あぐらをかきながら一人でチビ／＼と酒をのんでいる。どうみても賢人の類にはほど遠い。彼女は父を好きではないがこういう恰好の彼は一番嫌いだつた。

四十年近く与えられた仕事に満足して、何の努力もせず、明けてもくれても弁当箱を持つて探炭夫をしている父、何を考へて、五十年もくらしで来たのだろうか？ 一仕事や生活への欲望があるのだろうか——こんな事を考へて父を見ると生きている者ではなく、土で作つたたゞの人形の様に思はれた。そして嫌悪と侮辱の物を見る様な目で眺めて通つた。幼なかつた日々の想い出にも父に対するたのしいものではなく「恐い父」これ以外に、彼にあてはまる言葉を見つけようとしても無理である。

——月日は人間をそのまゝにしてはおかなかつた、子供達を良く打つた赤ら顔の壮い父も十幾年の偉大な時の流れに白毛も見出され、顔のそちこちに深い皺をもつた初老の男になつていた。又、打たれていつても生傷の絶えなかつた兄も大学を卒業して某銀行につとめ、涙で顔をくしや／＼にしていた道子も来年高校を卒業する娘に

つた前を引き合せて。

この女は二十を幾つ越えたらうか、三十には少し間がある様だ。肉づきが良くあごはくびれて短い首を窮屈そうに尚短かく見せて、皮ふの色が白く丁度肉の塊を思わせた。自慢にしている富士額も下ぶくれの熱っぽい感じのこの顔には美しくする何の役目もしていなかつた。どこと言つて美しくもないこんな女を父はなぜ後妻に選んだのだろうか。

彼女は妻としての役目は果しても母の役目は知らなかつた、朝から晩まで仕事もほとんどしないで、だらしない寝そべつてくだらない雑誌を読んでは時間をつぶしていた。何の事もない寄生虫だ、この様な彼女に何を言われても父は笑うともなし笑つていた。否、笑うのではなく口を開けているにすぎない。何と気の毒な夫婦だろう。激しい憤りを越えて道子はそう思つた。

「ね、ヤーさん（気嫌がなおると山田をこう呼んだ）今日ねSデパートで私の夏の着物買つて、それからT劇場で〇〇〇を見て来たのよかつたわ！主演女優のYMつてすてきだわ。今度行く時は一緒に行くよ。ヤーさんは酒ばかり飲んで、私とどつちが好きなの？」そう云つて又汗をふいた。山田は話しには興味がないらしく女の顔を無心に眺めていた。

「あゝ暑い／＼どうして暑いんだらう。こう汗が出てはかなわない、ヤーさんそのタオル湿してふいてくれな

眞美子への手紙

松 君

眞美子へ——
つゆからぬけだした東京の空でさえ、この頃は気嫌をそこねることがある——がそちらは
いかゞですか。
先達の君からの手紙新しい僕の勉強部屋でわびしく拝見致しました。あの日は丁度以前
頼んでおいた卒業後の職がようやくまとまり、久しく与えられなかった父からの杯や叔父
からの乾杯を受け、夜おそくいさゝか有頂点になり、自分の部屋に引き上げたときでした
君にも前に話したことのある例の雑誌社で僕等の学校からでさえ相当の秀才でなければ採
用されないという実情の中に、俺みたいな鈍才が良く——と考え続けていたとき、僕の心
は、快楽を追う凡人のそのの様に、無性に自分を誇示して見たくなりました。江戸川べり
の水は釜戸川の水の様に清くありませんが静かな流れに涙を落したはいれのある流れを
僕は大好きしていましたので、僕は、こゝ二、三日米目を通さなかつた三、四の手紙——
友達からの——を持つてサンダルをつつかけて君も知つて通り遠くもない流れの岸に向
いました。また兄たちがやつていらしいマーシヤンからのさわざを後にしたときはえた
いの知れぬ溜息がそつとまれ、安堵の気持が僕の足音を軽くしている様でした。相も変ら
ぬ人の悲は、僕の心の夢——無限なる大自然への夢を追求する——を少なからず憤害させ
ました。月の光が僕の心を涼しくしてくれましたが——
知らぬげには、笑む遠くある友の便り次に待つていたのは何だつたと思うか。僕はそ
とき寒さが身にしみ部屋に戻つていたが、常になくスムーズに運んでいるらしい筆のあと
に、いゝ知れぬ不安を感じながらも君の筆跡を追つたのだが……
手紙の中で、君は、姉の由美子と結婚して欲しいといつてた。美しいお姉さんのこと
だから、耽美派のあなたはすぐにも承知するだろうと思うけれど勝気な姉のことだから、
あなたをきつと幸福にすることが出来ると思つてあつた。そして姉のピアノはあなたの心
に美を与えもし万一の事があつた場合、身をたすけてくれるだろうとも書いてあつた。そ
んな事はどうでも良いけれど、とにかくあなた方が、結婚してうまくいつてくれれば私に
とっても非常にうれしい事だと思つた。自分は将来の夢即ち筆で世に立と

「あゝ」山田はノソツと立ち上るとタオルをもつて外へ出て行つた。彼女は側にあつた新聞紙を四つに折るといそしげに両手でバタ／＼と風を送つた。
「オーイ、雨が降つて来そうだよ、洗濯物いゝのかア」聞えたのか聞えなかつたのか新聞紙の手はやめなかつた。
しばらくして彼は下駄を引きずつて来た。彼女が新聞紙であおいているのを見ると、団扇を持つて来てあおいでやり、背中に腕を入れていかにも悦しそうにふいてやつた。
「ありがとういゝよ」上気した彼女の顔は涼しそうになつたが、彼は反対に体の中が暑くなるのを感じた。相変らず薄笑いながら彼女からはなれ茶わんの酒を眼をはそめて飲み、窓の側に行つてよれ／＼のバットの箱をとると、眼がね越しにのぞいて一本とつて無器用な手つきでマツチをすつた。
赤い堅いまばらの口の周りの無性ヒゲに酒のしずくがついているのかまわずに彼はうまそうにタバコをくわえた。薄暗い天井の低い室は煙で一層陰気にみえた。突然カエルが鳴き出して大粒の雨がはげしく降つて来た。彼の女はいつの間にか横になつて眠つていた。

美しくい星空の様な心でも暗い雲に横切られゝば、たちまち曇りとなつてしまふ——などと道子は思つた。道子達にとつて、恐い父だつた山田も一人の女によつて、精神がぬけ去つた様な男になつてしまつた。彼は四角型としたら、だん／＼角がとられて、曖昧な形になつた様なものだ。
道子の父は今年五十三だから二、三年もすれば停年になるだろう。収入がなくなつたら寄生虫の女はどうするつもりだろう。きつと逃げて行くに違ひない。それでも彼はたゞ口をあけて笑つてゐるだろうか。
夢の様な時間は今日も流れ去つてしまつた。道子が時計をみた時はやつぱり六時半。帰らなければならぬ時だ。あゝ、三十分の中にあの長屋を形もなく吹き飛ばしてしまふ事は出来ないものだろうか、と道子は思つた。夕日をあびながら彼女は埃りつぽい田舎道を歩いてゐた。道に面した農家の紫陽花の二、三日前は紫だつたのが今日は白く變つていた。
道子は十七才だつた。

うとしたことの様な華やかな夢はすてゝ、一步一步ふみしめた人生の勉強をするため、大学に入つて言語学を勉強しそして卒業したなら言語学研究の叔父の手伝が出来様少しでもそれに近づこうと思つて、今は何もかも忘れて受験勉強の準備中だとも書いてあつた……

これらのことは僕をどんなに暗黒におとし入れたことか、深い絶望感と快報を求めるあせりとは狂おしいまでも心の中を支配し、その後のことは知らない。とにかく我と我が身をベットの上面に見出したとき、みじめな男は涙をもつてかおをおゝつていた。恥も外分もなく——だが君から送られてもつていたあの大自然の中に流れる釜戸川の流れのひとすじは僕の涙を払い落とすことを余儀なくしたのだ。

次の日僕は早速君の兄貴に会いに行つた。そういうことなら少なからず力になるけれども本人の意志を無視することはできないということだつた。

君が僕に対して誤解を抱いているなどという凡人的な言葉は使えない。何故なら同じ耽美主義的お互の心に変りには絶体にないと信ずるからだ。君の心に疑いなどは抱くまい。虚栄などを感じない僕の心だ。午後父達の前に呼ばれて偶然にもやはり由美子との話があつた。僕はきつぱりと断つておいた。父達は笑い乍らまあ考えとけといわれた。絶対にいやだといつておいたが客がいたので君のことはいゝかねていたが、いづれの機会を願つて引下つた。君に会つてもう一度話をする——。

だが二、三週間の後これらのことは凡て甘い考えてあつた事を知つて己れの愚かさを激怒した。それから僕は僕の亡母と君たちの亡母との意志で僕と由美子との運命がきまつていたという話が正式に父の口から発表されたのである——。

常に不満を感じる自分を取りまく周囲に直面して内なる激怒や抵抗のみしか知り得ず、それに克服されてしまふ哀れな男を君は笑うだろうか。もう一度会つて話の糸をつなぐとしていたのをたち切られた男の哀れな敗北を君は笑うだろうか。何もかも終りだ——。

なる様にしかならぬ運命の糸にすがつて遠い思い出を書いて暮そう。それは美しくなくてはならない。そして僕達の間の思い出はすべて美しい。一つ一つの思い出が美しくページが集積となつて部厚く収められて永遠に僕の胸に残るであらう。僕にとつて由美子の華やかな美しさは必要ではない。故に愛なき愛の生活に引き入れられねばならぬ由美子は可愛想だと思ふが——勿体なさそうにこぼす君の白い歯、何ごとにかゝる目なすべて——君のすべては、僕の心を理性や智性でおさえることが出来ない程狂おしく胸中を支配するのだが——。

最後まで美しくありたい。

もう一度、ありふれた凡人的なことは何もいうまい美しく生ぬいて下さい——。

真美子様

幸 裕

こ た つ

石 本 あ き の

なまぬるいこたつの中に

足をぎゅーんとおぼして

複雑なふとんの模様を見つめる。

赤、黄、緑、

お前達は、

一刻も原色を離れようと

あくせくし、

一刻も無限の美を与えようと

もがきつゞけ

だいだいに、紫に、茶に、黒に、

ついには灰色になつて、

アメーバーのようにのびて行く。

九月四日の夕暮

鈴木澄夫

夕暮がせまつて来ると

たそがれの黒い雲の中で

私は今日も黒い涙を流すのだ

ふとんにひたと身をふしつけて

夕闇の匂をかく

東京つ子の甘つたれ聲

去年のノートより

三年 無名氏

○自己という名の人間”それはイソギンチャクのような存在である事”

○笑うという事はその瞬間における自己忘却である。だから俺はいつニヤニヤしているのさ(?)

○日本小説が私小説の領域から脱却出来ない様に、俺もまた自己から脱却出来ない。我執!

○せめてもの自己慰藉——それは自己弁護にはかならない。

○劣等感の排除——自己意識よりの脱却

○俺にとつての”表現”は自己弁護におよそ等しい。

○自己意識の過剰はたまたま度偽虚栄を生み自然性本来の自己を喪失させ偽善という力ですつぽりとその人間をしておゝつてしまうことがある(?)

○エゴイズムについてそんなに悩む必要はないさ。何故つて人間はそれのかたまりだつて事がお前にはわからないのか。バカナヤツメ!

○精神的な満足を得ようと又空虚な心を充足させようとしても、お前にとつてはむだな事だヨ。よく見たまえ、その網の様な穴だらけの精神を。

あわたしい自動車の地響

あゝ、あの女の聲

いつか聞いたアメリカンソング

夕暮の黒雲が

街を包んでしまつたら

暗い露路を歩こう

私は幸福を求めているのだろうか

それにしては余りにみすぼらしい風采

創作

褪 色

諸 橋 恭 子

周子にはどうしてもそれが神崎であると思えなかつた。蒼白なやせた頬をもつ中年の独身者の相貌はもう彼女の胸一杯に拡がり、もはや他の影像とすりかえられるべくもなかつた。

彼女は机をへだてた空間の一点をみつめた。彼女には既にそこに神崎が座つて居る様にさえ感じられ出して来たのである。いとしいものを抱きしめる様に彼女の眼は大きく優しく見開かれる。

而し次の瞬間自身の異常な心理に思わず顔を赤らめると嘆息と共に机に突伏した。

ノートは未だ幾枚も繰られて居なかつた。容赦なく過ぎる時間の中に周子はどうしようもない自分に苦しんだ。

前期試験の開始されたその朝ばかりは派手な歌声のmeler M女子大学本館の歩廊もさすがに乳色の石肌も冷く緊張した空気を漂わせていた。

気ざわしく飛び込んだ国文科研究室のドアの鼻先で周子は呼び止められた。

がすぐ窓際に腰掛けた和服の美しい中年の婦人を認める事が出来た。濃緑の一越の袂は膝の上で重ねられ、高く結び上げられた髪はふんだんに陽を浴びていた。室内には他の教授の姿は見えなかつた。外のやゝ殺氣立つた雰囲気とは反対にこゝだけが隔絶された様にのどかであつた。

周子は素直に歩いて行つた。

「貴女を見ると私の学生時代を思い出してよ。私も貴女の頃には優等生の見本みたいで、可愛くて——、これでもね。」

かつて一年の頃初対面の周子にかう云つてホ……と笑いかけた印象——、それは地方の旧家育ちの彼女を魅了するのに充分な、やゝ軽薄と思はれる迄に華やかなものであつたが——それを今周子は真珠の留めピンに思い出した。

「遅くなりました。」

「試験は出来て？」

笠原は前に立つた柔順さうな学生を暫く笑顔を上上げて眺めていた。笠原は美しかった。——わずかな静寂の間があつた。がやがて突然笠原は云つた。

「貴女結婚しない？」

それから声をあげて如何にも朗らかに笑い出したのであつた。

周子は顔色をかえたが、すぐ体全体が次第にはつて

「お峯が呼んでるわよ」

委員の声もしそかであつた。

「有難度う」

中では既にてんでに席を占めた学生達が最後の五分間を惜んでゐた。

試験、試験、試験、

学生達は授業料と引き換に試験をうける、学歴が次第に買取られる。「成績なんか受取よ。」と学生は笑う而し社会へのスタートラインはこの受取によつて決められるのだ。近代女性として少しでも抵抗少く生きて行こうというのなら彼女達は出来るだけ高い出発をしなければならぬ。これを学生達は卒業を目前にして始めて納得する。彼女達はこゝに到つて愕然とする。が一縷の望みをもつてなされる最後の受取のための前期試験に全精力を使いつくす。

午前中でその日の試験を終えた周子はクラス主任の笠原峯子に逢うべく教授室のドアを押した。明るい秋の午後であつた。室内の陽射しが瞬間彼女をたじろがせた

行くのを感じた。首筋が火の様であつた。それを止め様としてもどうしようもなく醜く立っている気のきかない自分を笠原の前に意識した。

「どうなの？」

笑つてゐる笠原の白い顔が間近にあつた。周子は何か言わなければと焦つた。無理な笑いが浮んだ。口が動いた。

「存じません。そんな事。」

はつとした。自身予期しない言葉であつた。言葉の持つ意味に氣付き周子はあわてた。笠原はもう笑つては居なかつた。

「そう、無理に今聞かせて頂こうと云うんじやないの、方針で仲々決らないものね。二、三日もしたら聞かせて下さる」

やゝあつて身じろぎもしないでまだ立ちつくしている周子に、

「もういゝのよ。お話はそれだけ。」

と言つた。

昼下りの国電は閑散であつた。毎夕すしづめに積まれて通るのと同じコースを髪を風に靡かせて乗つて行くのはこゝろよいものであつた。はす向いにR大の帽章をつけた学生が辞書を引いてゐる。それから少し離れて魚の行商らしい荷を下した男が眠つて居た。

教授室を出た時のやり切れない興奮は既に消えて居た

勉強と評判の……

洋品・洋服店

—平 信 販—

鈴木勘次商店

第一 本町一丁目電1638

第二 平和通り電 732

—楽しいふんいき—
に素晴らしい味
流れるメロデー

松月の喫茶

平市銀座街電206

—古いのれんに—
新しい味

—御菓子司—

松月堂

がそれに代つて周子は一種の自己嫌惡に悩まされて居た。「どうなの?」「存じません。そんな事。」此の對話は胸の中で幾度も反復された。笠原の前のだらしない赤面もさる事ながら何と云う返答を自分はしたのであろうか。存じません——とは何事か。存じて居ない所ではない。自分は今迄多くの結婚論を読んだ。特に女性に波の荒い社会にやがて出發しなければならぬ自分の取るべき方向は既に決つてゐる。特に抵抗の激しいであらう結婚については信念に迄凝り固つたものさえ持つてゐるつもりだ。真に個を生かす——これより外に道はないのだ。而し笠原の前の自分は一人の可憐な年頃の乙女でしかなくつた。あの時の赤面は乙女らしい羞恥からであつたろうか。少くとも外見的にはそうとしか見えなかつたに違いない。そしてこれらが総て無意識裏に起つた事がまず、彼女を堪え難くするのであつた。

而しやがて女性らしい好奇心が総てを覆つて行つた。周子にはある一人の男性が彼女を見極めてそのなかだちを笠原に頼んだとしか考えられなかつた。何故なら素直そうな見かけだけが取得で外に何の女性らしい技能も持たない容姿も十人並の書生臭い自分を、笠原が花嫁候補に抜擢することは到底想像出来なかつたから。嚙喰う虫のたとえの如く彼女を見込んだ男がプロポーズしたと考える方が遙かに自然であつた。

見染められた。——此の想ひは彼女の胸をこゝろよく揺振つた。では何時——誰に——それは笠原と周子を一

筋につなぐる人物でなければならなかつた。そして——彼女はいさゝかもためらはずに神崎を撰んだのであつた。

周子が神崎を知つたのは彼女の三年の春K図書館参考課の陰気な天井の下であつた。そろ／＼卒論の下工作と図書館に通い始めたものゝ往復の時間の甚しい浪費と疲労に忽ち音を上げた彼女は幸い同郷のS大生Hの知人をたどり参考課員神崎宛の紹介状を手に入れる事が出来た。そこで駄目ならもと／＼と覚悟をきめて書物の館外借り出しを企てる事になつたのであつた。

「これ神崎——雅(たゞし)つて読むの?」

「さうさ。知らないの?芭蕉研究の若手だよ。と云つても、もう四十近いがね」近世専攻のHは得意氣に言つた。書庫から怪訝そうに現れた色白の弱々しい埃まみれの男が神崎であつた。差出された紹介状を彼は中背のやせた背をまるめて読んだその有様はどう見てもスマートさとは縁遠いものであつた。流行遅れの襟の小さい色あせた背広からのぞいてゐるさ／＼くれ立つたカフスと、ねちれすり切れたネクタイを彼女は見た。がやがて顔を上げた神崎の黒い大きい眼と透き通つた頬に漂ふ優しみを彼女は親はしいものに思つた。彼は紹介者と周子の關係を尋ね「この頃この様な手に出る希望者が多く中でも貴女の本は毎日良く出ますので。」と口ごもつた。周子は緊張した。が神崎は暫く考えると、

「お借ししましょう。」

と書庫に立つて行つた。一大決心を要した風には見えなかつた。そこまですが如何にもスムーズなのが却つて周子を済まなく思わせた。

期間は一月であつた。がそれはすぐやつて来た。まだ半分も手をつけていない部厚な本を前に周子はあわてたが決心すると再びK図書館に神崎を尋ねた。

「あとの位と仰言られるのですか。」

黒い目で神崎は周子をみつめた。妙に幼い感じであつた「せめてあと十日も見せて頂けましたら。」

「十分にお読みになりましたね。」

「それはきりがありませんわ。」

周子は何となくほぐれた気分になつていたずらっぽく云つた。

「最大限一月としましょう。それまでに済んだら何時でも持つていらつしやい。」

とやがて神崎が言つた。周子は心から感謝した。

翌日帰りの電車で偶然乗り合せた日に周子は事の次第を話した。

「うまくやりやがつたな。」

彼は同じ手段で借りた本を催促されて参つたとこぼしていた。

「貴女も一月延して頂いたら。」

「やつぱりそこが女じやなきや駄目だよ。何しろ奴はまだ独身だからね。」

長身のHは窮屈なラッシュの中で前こぶみになつて慥と

意地悪な顔つきをした。

本は十日では読みきれなかつた。約束の一月一杯を費して返しに図書館を訪れた時神崎は留守であつた。が前期試験を終えた秋の頃校庭に思ひがけず周子は神崎の後姿を見たのであつた。彼女は神崎を忘れなかつた。特有なまなざしと脰甲斐なくさえ見えるその物云ひは彼女の胸に残つて居た。神崎は講師としてM女子大学の国文科に招聘されたのであつた。周子は友達と共に彼の俳文学の講座に出席した。

神崎は周子を忘れては居なかつた。階段教室の最前列に座っている周子をじつと見つめている事があつた。何か言ひたげであり乍らかつての図書館での事柄について彼女に話しかけて来ようとはしなかつた。

彼女は眼をそらした。講義は事もなく続けられた。

神崎の評判は割に良かった。授業の内容は講義の形を取つて行つた為彼の持味に充分触れる事が出来ずやゝ物足りないものであつたが彼の学者らしい無頓着さと子供っぽい気弱さは女学生側の気取つた雰囲気とは妙にちぐはぐでユーモラスでさえあつた。学生は良く笑つた。笑われると彼はどぎまぎしながらノートをあけて言つた事をもう一度確めて見た。そんな態度も此の教室の中では妙におかしかつた。

周子は良く笑う方であつた。他の学生の笑い止んだ後も一人で口を押えて笑っている事があつた。がふと気附

化粧品と袋物 ……

テルミ一
資生堂
コーセル
ベルゲール

一流化粧品揃ひ

シラドヤ

平市一丁目電364

東洋紡の
ダイヤモンド
手編毛糸

年中豊富に

取揃へて有ります

各種糸類・手芸材料

ハシモトヤ糸店

平市銀座 電話14番

じゃんがら

本舗 平市田町

電話六九一番

工場 平市紺屋町

電話一七〇三番

みよし

くと全身に神崎の視線を感じていた。周子は我知らず赤くなつた。それはしばしの事であつた。

秋は次第に深くなつた。神崎は相変らず古ぼけたグレイの一張羅であつたが暮も近い頃丈のつまつた似た色のオーバーを一着に及んだ。スクール・バスの停留所などでみかける彼のそうした凡体は木枯しの中で如何にも寒々と見えた。而し近附いて来る周子を彼は何時も同じまなざしでじつと見つめていた。周子は何時か神崎が自分を愛しているのではないかと疑う様になつた。

女は敏感であつた。バスに乗りあわせた時、遅刻を悔みつつ遠慮がちに教室に踏み込んだ時、授業の続く一時間余、変らず注がれる視線の上に今ではもうはつきりと彼の愛を認める事が出来ると思つた。そして事実そうであつた。

後期試験も間近に迫つた二月神崎の俳文学にノートの持込みを許可する旨がボードに発表された。他の学生達は躍り上つたが周子は困つた。暗記物なら二晩も徹夜すれば九十点は確保出来る。然しノート持込で先づ八十点を越えたためしはなかつた。「結局頭が悪いのね。」と周子は友達にこぼした。

試験の日は水雨であつた。案の状彼女は出来なかつた。気ぜわしくノートを繰り易しいものから手をつけて行つた。芭蕉と一茶の比較——その異同点を项目的に書き出してみる。而しこれらが飽くまで前者から後者への推移過程として説明されなければならぬのだ。理解してい

周子は時に自分が求婚される場面を想像した。

ある時は神崎の口が耳元にあつた。彼の黒い眼はその熱意を見せて大きく見開かれてあつた。

「僕は出来る限り貴女を幸福にするつもりです。」

而しそれは男らしい熱い意吹とはならなかつた。女性じみた格調の弱い一種の懇願であつた。人気がない夕闇の教室で彼女は幸福に震えてた。

又ある時は明るい月夜の教授室であつた。彼女は本を探していた。神崎はびんの花を眺めていた。振りかえつて彼が云つた。

「お願いがあるのです。」

而し何れの場合にも想像はそこでとぎれた。男の愛を受け入れた自分がやがてその腕の中に思ふさま身をなげかけて行くであろう姿を周子はどうしても思い浮べる事が出来なかつた。そんな場合彼女は必ず自分が拒むに違ひない事を思つたのであつた。それは一つの矛盾であつた。が決して拒みつゝ誘うコケツトリーではなかつた。もつと本能的な若い女の姿勢であつた。

而しさう云つた想像に酔ひつゝ、自身何かそれは不自然な成行きに思えた。常人には当然過ぎるコースも必ずしも彼にびつたりするとは限らない。第一彼にそんな気の利いた真似が出来ないのであるか。神崎は求婚等出来ないのだ。そして求婚なくして二人は何時か結びついて行く。そんな想像を越えた可能性が考えられるとしたらそれは自分達の場合にちがひないと周子には思われた。

るつもりでもどうにも纏まらなかつた。幾度も消しては書き直された。周囲の学生は次第に減つていった。彼女は焦つた。かじかむ指先をなめて暖めては必死で書き続けた。がわずかに二、三人になつた時やがて自分一人が教室に残される場合を考えないわけには行かなかつた。そして本当に彼女一人になつて行つた。

彼女は顔が上げられなかつた。見上げれば彼のまなざしがあるであろう。全身の皮膚が硬直する思いであつた。彼女はやつとの事できりをつけると椅子を引いて立ち上つた。

水雨は降り続いて居た。而し乳色に塗られている室内は明るかつた。机を分けて近づく周子に神崎は黙つて片手を差出した。周子は汚れた答案を手渡したくはなかつた。その手を越えて卓上に伏せようとした時誤つてそれは神崎の足許に飛んだ。

「僕が拾います」

神崎は叫んだが周子がかぐみ込む方がわずかに早かつた。四角な紙端をつまみ上げた時神崎がもう一方の端をつかんだ。周子は離さなかつた。神崎はなした。

周子はうつむいてポケットからハンカチを取り出すとゆつくり丁寧に泥の汚れを拭き出したのである。時間が経つた——がやがて顔を上げ手渡そうとした彼女はそれを受け取るべく再び差しのべられた手の烈しく震えるのを見た。瘦せた青白い指であつた——。

周子は此の時から神崎を愛した。

媒介者を使つて求婚する——此んな手段の残つて居た事が周子ははゝえませた。それは如何にも神崎らしいやり口と思われた。彼ならそんな方法に出るかも知れない。そして次第に——もう確かに今はそれが彼としか思えないのだ。

而し——自分は何と応ずるのであるか——。

周子は窓を開け放つた。八つ手の濃緑と美しい飛石の配置は凡そ「下宿」の観念とは縁遠いものであつた。がそば屋の二階に住まう事は彼女には許されないので。月々の大きな負担を忍んでも故郷の父母は彼女を「固い家庭」に預ける必要があつたのだ。

彼女は遂に少しも涉らないノートを伏せた。時期もあろうに試験の最中にこんな事を平気で云うた原のラフな感情をうらんだ。苦しかつた——が嬉しさはあつた。

而し彼女には笠原の前で断りを述べる時の自分の姿が思われてならないのであつた。どうして——しても宜しいです。」等云つたものであろうか。彼女は又相手を明らかにしない笠原の非常識なやり方をにくんだ。

がそれより「結婚」とは何であろうか。彼女にとつて神崎はかたわらに立つ優しい男性であつた。彼の黒いまなざしを常に彼女のものとさへ出来るなら「結婚」と云う形式を必ずしも必要としなかつた。むしろ出来る丈回避したかつたのだ。而し——それは一つの夢にすぎないであろう。

編集後記

◇芽生える若草のように—

一時発刊を危ぶまれた關伽井第十号は、多くの困難を克服して頁数は少い乍らも一冊の雑誌として誕生することができました。

◇夏期休暇前に—と未熟な上に編集を急いだので手落の所があるかも知れませんが、予定通り机上にお送り出来たことは私達にとつてこの上ない喜びです。

◇先生方や八木東作氏の御協力に、そして、誌上に広告を掲載して下さった商店の皆様から感謝いたします。



それに——周子は「貴女結婚しない？」と云われた時の笠原の華やかな白い顔を思い浮べた。結婚——本当に結婚であつた。それは上段の間の古びた床を背に年老いた母から「周子、お前ももう良い年だから」とおづ／＼切り出されるものとは自ら異つてゐた。自分と神崎のためにあの美しい笠原が奔走する——それは恐らく「嫁入り」に甘んじなければならぬであらう周子に一生にたった一度めぐつて来た結婚の機会であるかも知れなかつた。

自分は幸福にならねばならぬ。自らそれを掴まねばならぬ。旧家出の淑母としてのつましさと冷い思慮の中に過ぎた色褪せた青春の最後はこうして彩られねばならぬ。冷やかな褪色に生きつゝも如何に自分は花開く時を待ち望んだ事か。

結婚すると云はねばならぬ。結婚すると自分は笠原に言はねばならないのだ——。

ふと彼女は我に帰つた。ハツ手の下を小大がかすかな落葉の音を立てゝ通つて行つた。部屋を隔てゝ幼い声で家の子が呼んでいた。

「お姉ちやま。お姉ちやま。お三時お忘れでしよ。」陽はかげろうとしてゐた。

周子はノートを取り上げた。何はともあれ明日は試験なのであつた。

(未完)

(以下次号)

正しいメガネ!!

最新式検眼器

レフラクトメーター設備

眼鏡専門

松本

平市一丁目二六
電一八五一番

今年も絶對の自信を以つて

お薦めする!!

高級呉服は北川で……

ゆかたは五百萬圓懸賞の磯浪ゆかた
かやは近江本場琵琶印かや

平指定

商店

北川呉服店

一丁目 電話三九四番

ウーマンリー

フランス流行を取入れた最も漸
新な服地が、いつも豊富に取
揃へて皆様を御待ちして居り
ます

洋装の エビスヤ

平驛前大通り
TEL 438

信頼出来る商品……

それは外観だけでは分りません

三十年の経験ある

専門店で御撰擇下さい



平市三丁目二十一
電話 三九九番

流行のポイントを集めて

魅力ある着こなしは良い下着をお選びになることです。

×ブラジャー 50円より
×コルセット 80円より
×キヤミソール ×スリッパ
×ペティコート ×バンデイ

身にしみる様に漂う高貴な香り
×エリザベス ×スマラン
×夜のリボン ×エメロード
×キヤラ ×ヘリオトロープ
100円より

雨の日のお洒落に
かるくてすべし
×ナイロンレンコート

定評ある品質とデザインを
ごらん下さい。

高級洋品 **百 合** 本店 驛前大通り
支店 TEL/8/7

注文・修理迅速丁寧

夏は足元から!!

信用と技術を誇る当店へ!!!

靴の…… 吉 田 屋

銀座通り TEL416

昭和二十九年七月五日印刷
昭和二十九年七月十五日発行

編輯兼発行人

福島県立磐城女子高等学校
文芸部

印刷所

加納

平市紺屋町一五